

「昔、そんな歌、流行っていないなかったっけ？」

里子の言葉につられた宮川が『遠くへ行きたい』

を鼻歌でうたいはじめた。

哀愁を帯びた彼の声に誘われるように、里子もいつしよにハミングする。

春風の中で、二人の声は溶け合いながら、波の果てへ消えていく。

「あなた歌上手でしょう」

「歌？」

「歌なんか、うたわないです」

夜行列車で出会ったときの会話が里子の心の中でリフレインする。

#### 四

帰りは奥さんとの話し合いがどうなるかわからないので、それぞれで帰ることにして、宮川とは三ノ宮駅で別れた。車で大阪駅まで送るという宮川の申し出はありがたかったが、どこかでふっ切らなければ、ずるずるいつしよに行ってしまうような危惧があったので、里子は断った。

松代とは大阪駅の中央改札口で待ち合わせていた。彼女がどこにいるのかキョロキョロしていたら「里子さーん」とすぐ傍で声をかけられた。たった二十日間のあいだに松代は、げっそり老けていた。染めていた髪も白髪丸出しになって、頬

の肉にも張りがなかった。

（これじゃ、近くにいっても誰だかわからないはずだ。松代さんどこか悪いのかな……）

こんなことを考えながら、里子は彼女と並んで歩いた。

もつと美味しい物を食べに行こうと誘っても、松代は地下街にあるレストランでいい、と断った。

「里ちゃんが連絡くれたとき、ホッとしたわ」

松代はこんなことを言いながら、ハンバーグ定食を美味しそうに食べた。

苦いだけで香のないコーヒーを口に運びながら、松代は娘の夫婦仲がうまくいっていないことを辛そうに語った。

「両親が離婚したら困るのは孫や。これから習い事や、塾やいうてお金があることが続くのに……」

「……大変ね」

里子は松代をどう慰めてあげたらいいのか、わからない。

「親子揃って男運がないんやけん……」

溜息をつきながら、松代は肩を落とした。

「松代さんがいなくなって、ハルさんとわたしだけでは店忙しくて、アルバイトの子、雇うことにしたんですよ。松代さんが戻って来てくれたら雇わなくても済むんだけどって、女将さん言ってたわ」

里子は松代の姿に堪りかねて、自分だけの思

いつきで喋った。

「そうしたいんだけど、このままじゃ孫が不憫だね」

「こっちで仕事は？」

「探しているんだけど、年が年やし、なかなか難しいわ」

松代は吐き出すように言って、ナプキンで口元を拭いた。

『はまゆう』に戻って来てくれる気があるんなら、伝えておくけど……」

少し強引すぎるかな、と思っただ、里子は言わずにいられたなかった。

「じゃ、娘夫婦のことが片づいたら、お願いしま

す……」

あつさり松代に頭を下げられると、里子は責任を感じる。

別れ際に、デパートの地下で買ったメロンとチーズケーキを孫への土産代わりに渡したら、彼女は涙ぐんでいた。

松代の細い後ろ姿が雑踏の中へ消えていくのを見送ったあと、里子はデパートへ引き返して紳士物売り場で、宮川へのプレゼントを選んだ。

誕生日に思いもよらない贈り物をもらったお返しのつもりだ。

（奥さんと繕りが戻るかもしれないのに、プレゼントはしないほうがいいのかもいけないけれど……

…

そう考えながらも、里子はネクタイピンを買った。

デパートをでて、このまま帰ろうか、せつかく大阪まで来たのだから、麻美の女子寮へ寄ろうか、それとも宝塚の姉の顔を見に行こうか、里子は迷った。

京都の大学に通う麻美は青春を謳歌しているのか、部活やアルバイトに忙しいようだし、今から京都まで行くのも億劫だ。それに麻美は四月になったら何日間か帰ってくるらしいので、里子はめったに会えない姉のところへ行くことに決めた。姉の家は、JR宝塚駅から歩いて十分もか

してるん？」

「あんたも物好きやね。何でまた今更そんなことしてるん？」

里子より九歳上の姉は、夫婦共働きだったので、会社を早期退職して旅行三昧の日々を送っているらしい。

「独り暮らししたことがない姉ちゃんには、わたしの気持ち理解できんと思うわ」

こんな言葉で里子は、姉の批判から逃れた。

「いつかいつしよにスペインへ行こうよ」

昔から自分の世界へ里子を引き込むのが得意な姉に「うん、また考えとくわ」と言い、玄関をでた。

新大阪駅へ着いたときは、さすがに疲れていた。

座れなかったらいけないので新幹線は指定席に

したが、思っていたより乗客は疎らだった。

里子は、姉が持たせてくれたどこかの国の土産ら

しいハーブティーやらクッキーなどの入った

紙袋を丸めて、旅行カバンに入れ、過ぎていく街

のネオンサインを眺めていた。

渾一に会いに行くため何十回乗ったかしの

い新幹線も、ますます速く便利になっていくが、人の心にゆとりがなくなってきたと、里子は思う。子供たちを連れて訪船していた頃は、世の中がもつと優しかった。

あれは、麻美が五歳で晴海が三歳のときだった。

二人ともやんちゃ盛りで、何でも大人の真似をし

たがった。車内販売が来るたびに何やら二人でひ

そひそ話し込んでいたと思えば、

「ちよつと、お水飲んでくるけん。ついて来んで

もいいよ」

心配顔の母親を置き去りにしていなくなった。

なかなか戻って来ない子供たちをそろそろ見に行

かなければ、と里子が考えているところへ、

「お弁当にお茶はいかがですか、アイスクリームもあります」

車内販売員になったつもりの麻美と晴海がすま

し顔で自動ドアから現れた。

里子は恥かしくて顔から火がでる思いだった。

(今すぐにでも止めさせなければ……) 里子が意

を決して立ちあがろうとしたとき、

「すみません、幕の内弁当、一つください」

耳を疑うような声が聞こえてきた。

「いくらですか?」

「二百五十円です」

「じゃ、五十円お釣りください」

る時代だったのだろう。

最近はどうな乗客がいるのかわからないので、

そんな呑気な旅はもうできない。

(他にもいろいろあったな。訪船した当座は父親

を睨みつけていた晴海が、帰りには「いつしよに

「はい、わかりました」

しているつもりのエプロンのポケットから麻美が

お釣りを出している。それからもつぎつぎに乗

客から声がかかり、お客とのパントマイムに拍

車がかかっていった。

次の車両でも二七販売員に結構本気で相手にし

てくれる客が多くて、小さくなっていた里子を

ホツとさせたものだった。万事が今より余裕のあ

たかまつ かえ 高松へ帰ろう！」と新幹線の駅まで見送りに来た  
おとむ さけ 夫に向かつて叫び、上りのエスカレーターを下  
ろうとしたときは、危ないのと、辛いので、身  
を切られるような思いがした。宮川さんとも、  
いろんなことがあっただろうに……)

すき ひび なつ 過ぎ去った日々を懐かしんでいる間に列車は  
おかやま どうちやく 岡山に到着した。瀬戸大橋線のホームまで来て、  
でんこうけいじばん みあ 電光掲示板を見上げると、高松行マリンライナー  
は、最終便だけになっていた。  
はつしや じかん 発車までになりに時間がある。

『はまゆう』が休みの日は、ビデオで古い映画を  
観ながら眠るのだと言っていたハルに、里子は

でんわ 電話をした。早く松代のことを報告しておきたか  
った。

「あつ、里ちゃんどうしたん？」

「いま岡山なんだけど、実は、大阪の姉のところ  
へ行ったついでに、松代さんに会ったんよ。娘さ  
んどいろいろあるらしくって……。香川へ帰る  
かもしれないんで、そのときにまた『はまゆう』  
で働きたいって。詳しいことは帰ってからお話  
します。黙って会ったりしてごめんなさい……」

休みになる前、里子は大阪へ行くのは、姉や  
麻美に会うためだと、ハルに言っておいた。

「謝ったりしないでよ。そう、松代さんも大変ね  
え。うちはいつでも待ってるわよ。あつ、それか

らね。居酒屋『はまゆう』の方は来週いっぱい  
終わりにすることにしたから、最後の夜だけ里ちゃ  
んに手伝ってもらいたいんやけど、いいかしら……」

「ええ、いいけど、また急やね」

「こんなことは、さっさと思い切った方がええ思

うんよ……」

心なしかハルの声は淋しそうだった。

(松代さんが帰って来てくれれば、また元気になる  
かもしれない。そうならわたしはどうしよう  
かな……)

里子は駅のホームで温かいお茶を買って、  
列車に乗った。車内は空いていた。

自由席の前の方に座った里子は、姉がくれた土産  
で重たくなった旅行カバンを傍らに置き、大阪  
駅のデパートで買ったネクタイピンの箱を出し  
て、手のひらに乗せてみた。

(以上8月5日放送分)